

古居みずえドキュメンタリー映画支援の会

第6号 2011年2月15日発行

通信

『ぼくたちは見た』

「ガザ・サムニ家の子どもたち」がこの夏公開されます

古居みずえ（フォトジャーナリスト・映画監督）

二〇一一年、今年は「ぼくたちは見た」ガザ・サムニ家の子どもたち」がいよいよ上映となります。ここまで至ることができましたのも、ひとえに皆様方の温かいご支援があったからだと思います。どうもありがとうございます。

昨年の十二月十八日には「完成記念トークイベント」を行ない、百人を超える方々に参加していただきました（詳細は二〜四ページをご覧ください）。

当初は自主上映だけを考えていましたが、完成が近づくにつれ、今回の子どもたちの映画は、できるだけたくさんの方々に観ていただきたいと思うようになりました。

世界では戦争や紛争によって家族や日常を奪われ、子どもらしく生きることができず、心の傷に苦しんでいる子どもたちがたくさんいます。

この映画はパレスチナのガザ地区の子どもたちに焦点をあて、二〇〇八年から

〇九年にかけてのイスラエル軍のガザ大侵攻で、肉親を亡くした子どもたちの生活に密着し、彼らの話や彼らが描いた絵を通して、その心の傷を映し出しています。

ガザの子どもたちが悩み、苦しみ、それでも生きていく様は、一見、平穏で豊かでありながら、多くの子どもが心の病を抱える日本の現状にも、何か問いかけるものがあると思います。

この映画の主人公たちは十歳から十三歳の子どもたちです。日本のいくつかの中学校で映像を見ていただいたところ、生徒たちから共感のメッセージが寄せられました。同年代の子どもたちが想像を超えた厳しい状況にいることを知って、素直に反応してくれたのです。そういう意味で、特に中学生、高校生の子どもたちにもぜひ観ていただきたいのです。

また子どもだけでなく、その親世代の方、またパレスチナの映画は初めてとい

う方など、できるだけいろいろな層の方々に単にパレスチナ問題という視点ではなく、同じ人間として、同じ子どもたちを持つものとして、観ていただきたい、そういう思いから劇場で公開することになりました。

劇場公開は今夏を予定しています。映画は完成しましたが、これから広報・宣伝をしなければいけません。せっかく撮影しても、せっかく編集しても、映像が皆様のところには届かなければ何の意味もありません。

今回は経済的事情で配給会社を通すことができませんでした。そのために自分たちの手でしなければなりません。それでもチラシやポスター、パンフレットなどの制作の費用、宣伝、デザインなどの人件費を含む宣伝の費用、試写やイベントの広報の費用などのお金は最低かかります。それは映画を制作した費用と同じぐらい、あるいはそれ以上かかります。映画をたくさんの方々に届けるためにも、ぜひご協力をお願いしたいと思います。皆様の方々に声をかけていたり、あるいはボランティアなどで関わっていただいたり、皆様の知恵と力をお借りして、この映画を広めていただければと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

「パレスチナの人びとに親近感が湧いた」

古居みずえ第2回監督作品感性記念トークイベント

「ぼくたちは見た〜ガザ・サム二家の子どもたち〜」より

昨年（二〇一〇年）十二月十八日、古居みずえさんの第二作目となる『ぼくたちは見た〜ガザ・サム二家の子どもたち〜』の完成を記念したトーク・イベントが東京神田にある明治大学リバティタワー内の教室で行なわれました。

初めに、パレスチナ子どものキャンペーンの田中好子さんに最新現地報告をしていただいた後、映画の冒頭部分の上映、古居さんの「ガザの子どもたちを撮って」の話と続き、いよいよ渡辺りえさんとの対談が始まりました。

今回はその対談の要旨をお伝えしましょう。

自分たちに何ができるかと自問

「古居みずえ対談シリーズ」の記念すべき第一回目のゲストは、女優であり、演出家でもある渡辺りえさんでした。今回は進行役を日本国際ボランティアセンター（JVC）の藤屋リカさんにお願いしました。

えりさんは、事前打ち合わせでどんどん質問してしまつたそうですが、その理由を「以前、自分は（パレスチナのことに）無知であつた。パレス

チナやガザのことを知れば知るほど、そこに暮らす人びとに親近感が湧き、自分たちにどんなことができるのか、との思いが強くなつて、打ち合わせの時も古居さんにどんどん質問してしまつた」と話されました。

渡辺りえさんには、『ガーダ〜パレスチナの詩〜』の時から支援の会にお力添えいただいています。

『ガーダ』を観て、そして、今回の『ぼくたちは見た』を観て感じること……山形出身のえりさんには、ガザの人びとの暮らしぶりが自分の田舎を彷彿させると言います。まだコミュニティが機能していて、情の濃い人びとがたくさんいて、家族を大事にする雰囲気。人を放っておけない人ばかりで「親戚のおばさん達にあつたような気持ち」と表現されていました。

パレスチナの人びとも私たちと同じ

イラク戦争の頃から「非戦を選ぶ演劇人の会」を演劇界の有志で立ち上げ、リーディング（朗読）劇を毎年続けてこられた渡辺りえさん。そういう

中で、パレスチナと関わっている古居さんや土井敏邦さんに出会つたと言います。

「芝居をすることになって、関連の本を読んだり話を聞いたりして、まだまだこういう苦しみがあったんだ、という強い衝撃を受けましたね。その当時、だいたい十年くらい前つて、ちゃんとパレスチナ問題を知る演劇人は誰もいなかったんです。

今も、情報番組に出演していますが、そこで一緒に緒しているテレビ局のアナウンサーでも、パレスチナの詳しい問題については知らない。一般のジャーナリストが理解していない印象があります。イメージだけが先行するなかで、私は古居さんの映画に助けられた。そこに暮らす人びとの具体的な姿が伝わってきた。苦悩が理解できた。彼らも私たちと同じ。泣いて、笑つて、歌つて、そういう暮らしがよくわかつたんです」と。

フリーでなければできない仕事

古居さんは、今回の映画にも「私たちと変わらない人びとが暮らしているガザの現状を少しでもわかつて欲しい」という願いを込めているそうです。

「えりさんが言ったように、ガザの人びとつて、本当に人情に厚いですね。えりさんなら、ガザに行つてもすぐに溶け込めるのではと思います。えりさんに出会つて山形の女性たちの話を聞いて、逆に私は、ガザの女性たちと同じなんだな、と山形の女性たちに親近感を覚えました。『ガーダ』は女性の生き方を通して『現場』を知ってもらい

たいと思いました。今回は、子ども達を通して、ガザ攻撃も含め、そこで何が起こり、その後、どのように人びとが暮らしているのか、それを伝えたいのです」。

そこで、えりさんから

「ガザのことって報道されなくなっていますよね。日本でパレスチナのことを報道されない原因ってなんですか？」との質問が出ました。

古居さんからは、

「報道はされていると思います。でも、それは大きな攻撃の時だけの報道なんですよね。攻撃が終わると報道されない。だから、日本の人びとは『パ



左から進行役の藤屋リカさん、古居さん、渡辺えりさん

チレスチナは平和になったんだ』と勘違いさせられている。でも、本当は、封鎖が続き、復興もままならず、今の方がずっとときつい暮らしなんです。だから、私はそういう人たちの生活を伝えたいと思います。定点観測のように、長期間腰を据えて現場に留まって、そこに生きる人びとの様子をしっかりと取材し、伝える仕事は、フリーでなければできない仕事だと思います」と力強い答えが返されました。

それぞれの人が自分のできることを

その後、日本の私たちの支援の話に移りました。えりさんは、一昨年、パレスチナ人の方々を家に招いて、直接お話しをする機会があったそうです。

「彼らも非常に知的な立派な方々でした。『ぼくたちは見た』を見ても、子どもたちが利発そうに話している。ただ、ガザの人たちは自分のやりたいことをしたり、留学したりといった自由がないんでしょう。おせっかいお婆さんとしては、私たちができる支援って何？ とすごく思ってしまうのです。何ができますか？」

古居さんは、

「彼らが自由になることについて、実際、私たちのレベルで何ができるのかは難しいと思いますが、彼らも自由に生きたいという願いを持っていることを私たちの多くが知っていくこと、感じていくことは大事なことだと思います。」

十二歳の少女が、『封鎖が解かれなくてもいい。支援が無くなってもいい。今、私たちに何が起こっているかを知って欲しい』という場面があります。これは、本当に私も気持ちが痛かったです。

実際、支援がなくてもよいのかと問われれば、もちろん支援は必須でしょう。でも、支援を受け多少の生活が補償されることは、ガザの人びとの本当の願いではないんです。私は、自分ができるところをしようと思っています。それは、私が、彼らの肌感覚、本当の彼らの声を知らせていくこと。これが私の役目だと思うから。だから、えりさんも、非戦を選ぶ演劇人の会でパレスチナを含め平和を願うリーディングをされている。それぞれが、自分のできることをやるのが大事なんだと思います」。

と答えました。現地で、ガザの人びとにがっかりと関わっている古居さんだから、ガザの人びとの本当の願いを語っても説得力があります。古居さんの「支援ではなく、自分たちで生きたい。普通の生活がしたい。ガザには、ただそれだけを願っている、私たちと変わらない人びとがいる」という言葉は、他者から与えられるものだけの暮らしで人は尊厳を維持し続けることは難しい、人間らしく生きるとは、どういふことなのかを伝えてくださったと感じます。

居心地が良いと感じさせるパレスチナ

最後になり、えりさんが

「誤解を恐れず言いますが、非常に凄惨な状況で

生き抜いている人びとを前には言っではいけないことだとも思うのだけれど、映画を見て『そこに暮らしてみたい』と思う自分がありました。それ暮らしてみたい』と思う自分がありました。それは、自分が生きている今の日本に（ガザの人びとが持つような）愛情深く迎えられる眼差しがない時代なんだからでしょうか。

今度、虐待を扱った芝居をするのですが、そこで出合う日本の現実にはあまりに殺伐としている。だから、ガザの人たちの方が幸せに見えてしまう複雑な気持ちが湧いたのですが」。

と勇気ある感想を述べられました。

古居さんも、そのことについて

「私もそう感じることはあります。初めてパレスチナに行って、五か月間居候してしまいうくらいです。居心地がいいと言うか、それほど居させるものがあるわけです。

日本は、田舎でもそういう感じは無くなりつつありますね。そういう感じとは、具体的に言えば、人間らしさとも言うのか、シンプルなことなんです。子どもや年寄りを大切にする、とか、近所の人とのやり取りがいっぱいあるとか」。

とガザへの感じ方を共有されていました。

自分も加害者になる危機感も感じた

対談のまとめとして、えりさんが「自分の環境が大変だからこそ相手を思いやれるということもあるんだと感じます。それを、この映画を見ながら一緒に学んでいきたくなりました。自分を思い、

相手も思うような気持ちを学ぶために」と『子どもたちは見た』の講評をしてくださいました。

「そして、人間はいつでも加害者になる可能性があると思うんです。映画の中に、イスラエル兵が破壊した家の散らばった家財道具の中にあつたコーランに便をしていったことが出てきました。普通はしないですよ。でも、そういう立場や場面になったらやってしまう。私だってそうかもしれない。こんなおせっかいおばさんだから、もし自分の国が戦争になったら、地域のリーダーになって、竹槍訓練とか『もつと強く突き刺さない！』なんて感じてやってしまうのではないかと思つて恐い。

他の映画でも観ましたが、イスラエル兵だつて普通の人でした。侵略戦争の兵隊だった日本兵だつて普通の何気ない人。そういう人が、置かれた立場や場面によってはやってしまうという危機感を、自分自身に突きつけておくためにも、古居さんの映画はとっても大切だと思つています」とも。

えりさんのまっすぐで温かいお話。古居さんの力強いメッセージ。短時間ではありましたが、第一回目にふさわしいすばらしい対談となりました。

（まとめ・土井幸美）



参加者の声——アンケートより

◆「ガザ攻撃から二年」と聞いてもそれがどんなことか知らうともしないで過こしていたことを恥じた。

◆普段行くパレスチナ関係の講演会でパレスチナの現状はわかるが日本のことと関連づけることはあまりなかった。ので、渡辺さんの話は共感できた。

◆渡辺さんの姿を通して、一般の人がパレスチナ問題に接した時にどんな疑問、感想を抱くのが見えてきた。

◆ガザで起きたことを漠然としか捉えていなかったことに気づかされた映像の内容は衝撃的だった。戦争で行なわれたことが裁かれないことにも憤りを感じる。トークはとても濃い内容だった。古居さんの「パレスチナは居心地がよかった」という言葉が印象的。

◆絶対に映画全編観たい。空爆のシーンすごく衝撃的だった。今までどれほど自分が無知であつたか知ることができた。

◆自分は自由に生きていないと思つていたが、映画を見てそれは間違いだと思つた。まったく自由がない子どもがいるのにそんなことを言つてはいけないと思つた。

ガザの今

北林 岳彦

すでにご存知の通り、アラブ世界では政治的な激動が起きています。

チュニジアに発した民主化・現政権への退陣要求運動は、一ヶ月のうちにアルジェリア、エジプト、ヨルダン、イエメンなどへ波及し、チュニジアではベンアリ政権を打倒しました。またエジプトではムバラク政権への退陣要求はさまざまな政党や組織が団結する大きなうねりとなつていきます。イエメンでもサラーハ大統領は世襲制を断念したようです。

逆にアルジャジールの報道内容への批判もあるようです。またラマッラー、ガザの両政府とも反ムバラク政権・エジプト民主化支持の街頭行動を禁止し、大衆の大きな動きは認めていません。

もともとパレスチナは占領下、辛うじて自治政府管理下にあるわけで、イスラエルの軍事占領が主たる抵抗の対象です。その意味で実にさまざまな取り組みがあり、パレスチナ民衆の政治意識は高いレベルにあります。もちろん多くのパレスチナ人の間では今回の草の根の民主化運動は興奮と支持をもって捉えられているに違いありません。

しかし、進まない和平、悪化する人権状況や経済、とりわけ長期化するガザの封鎖、拡大の一路のイスラエル入植地といった現実、パレスチナの大衆意識は疲れと諦めを感じていると思われるふしがあります。

ヨルダン川西岸地区では昨年9%にも及ぶ経済成長があつたとされて

います。これは分断され機能麻痺に陥っている農業生産や製造業ではなく、きらびやかなショッピングモールや不動産物件の建設や投資、一部富裕層の消費購買力に支えられているもので、しっかりと地域の持続可能な発展に根ざすものかは疑問です。

という現実を見落としてしまうでしょう。多くの人びとが失業状態にあるだけでなく、空襲で農地や工場を破壊され放り出された新たな経済難民もいます。仕方なく危険なトンネル掘りに活路を見出す人たちもいます。金属やプラスチックを捜して瓦礫やゴミをあさる子どもの労働が深刻です。家計を支えるために学校をやめてしまうのです。それでも一日数ドルという収入では食べるものを購入するのがやっとです。

ショッピングモールは実は封鎖下のガザにも出現しています。エジプト国境に掘られた「密輸」トンネルを経由した物資が目玉商品であつたわけです。しかし昨年五月の救援船団攻撃事件以降、国際世論を気にしたイスラエル政府は物資の移動規制を緩和、建材を除きイスラエル製物資がかなり入ってきているようです。

何より、他所で生産されたものを消費物資として買われ、あるいは援助としてあてがわれるだけで、自ら生産し地域経済を成り立たせていくことが困難になつていきます。

一方、現在はエジプトの動乱でエジプトからの物資が入らず、ガソリン不足などが噂されています。

そして、このような状況を変え得る自分たちの独立した政府がない、変えてくれと運動する対象がないことが他国とも異なります。自分たちで状況を変える展望が持てない、どのような要求の声も、どこに向かつて叫べばいいのか分からない、というのがパレスチナ人の、ガザの人びとの現実です。彼ら・彼女らは、エジプトの政変をある意味で羨望しているのではないのでしょうか。ガザでは未来に希望を託せるのか、誰も答えられる立場にないのです。

このように安定性を欠いた物流は猫の目のような市場変化を招いています。闇市経済での一攫千金の夢が唯一の成功のビジョンですが、それも政治情勢で左右されているのです。

ショッピングモールに積まれた家電製品に目を奪われると、ガザの封

支援の会 っこれから」の予定

♡ イベント

「ぼくたちは見た」ガザ・サムニ家の子どもたち」を知っていたくため、今後はより広い領域のゲストを迎えて、より多くの方々に関心を持っていただけるような機会を設けたいと考えています。この夏予定の劇場公開までほぼ毎月、トークイベント等を催すことを企画中です。まず二月は――。

二人のフォトジャーナリストによるトークイベント

《子どもたちを撮る》

ゲスト 安田菜津紀さん

二月二十五日（金）午後七時

会場 池袋「月の砂漠」

（アラブ料理の店）

参加費 千円（軽食とお茶代）

ぜひご参加ください。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

当日、イベント準備、片付け等のボランティアも募集中です。お手伝いいただける方、事務局までご連絡ください。お待ちしております！

♡ メルマガ

「イベントや、上映の予定などを支援者の皆さまにいち早くお知らせするため、メルマガジンの発行を予定しています。配信ご希望の方は、支援の会のメールにアドレスの登録をお願いいたします。アドレスは下記の通りです。

目標は500万円です！

昨年9月から募金を始め、今年1月末までに約180名の方々から162万2000円の賛同金をいただきました。ご協力いただき、誠にありがとうございました。

しかし、残念ながら目標金額の半分にも達していません。友人や知り合いの方々へも支援の輪を広げていただければ幸いに存じます。

賛同金：1口 個人 3000円

団体 10000円

多数口大歓迎です。

郵便振替口座 0021-3-95264

口座名 「古居みずえ映画支援」

＊他の金融機関からご送金いただく場合は

ゆうちょ銀行 支店名 ○二九（漢数字）

宛にお願いいたします。

尚、お手数ですが、ご送金後メールでご住所とお名前をお知らせください。

＊インターネットバンキングをご利用になれば、郵便局に行かずに送金ができます。お試しになってはいかがでしょうか



ボランティア募集中！

イベントの企画、当日準備、チラシの配布、発送作業などのお手伝いをしていただけの方は下記までご連絡ください。

古居みずえドキュメンタリー映画支援の会

代表：土井幸美・北林岳彦

<http://support-miz.thyme.jp/> E-mail: eigashiennokai@hotmail.co.jp FAX 03-3209-8336